



C a f e   E n t r o p y

作 池田真哉

二人の長身の男が穴を掘っている。辺りは薄暗い。黒のスーツに、痩身で頭の毛は逆立っている。ひとりは赤で、もうひとりは緑の頭をしている。スコップでぎっくぎっくと土を掘る音が響く。

「おい。そのくらいでいいだろう。グロウ」

緑の男が、土を掘る手を止めた。上にいる赤の男を見上げた。赤の男は、すっかり掘り起こされた土を綺麗な形の盛土にして仕上げている。

「手を引っ張ってくれ！ レポティン」

緑毛のグロウは、赤毛のレポティンに手を貸して、引き上げようとして力を入れた。そのときである。カクーンという猛烈にでかい音が鳴ったと思うと、グロウは、穴に再び落とされ、腰を強打した。上を見るとレポティンが頭をこちらの穴に突っ込んで倒れている。

「レポティン！ どうした。レポティン」

返答はない。すると、レポティンの頭からなにか液体のようなものが滴ってきた。手に当てて見ると、薄暗く見えないが、血の臭いがする。

急いで、跳躍して穴の縁に手を掛けて、一気に外に飛び出た。そして、レポティンを見ると、意識を失って倒れている。垂直に逆立っていた毛は、部分的に乱れている。即座に、グロウはレポティンを抱き上げ、頬を強く叩いた。血は顔面全体に流れている。それをグロウはハンカチで拭う。さらに頬を叩くと、レポティンに意識が戻った。

「頭が痛い」

「ああ、何か翔んできて頭に当たったようだ。今日は、帰ろう」

「そうしよう」

「歩けるか」

「ああ、大丈夫だ」

レポティンとグロウは、肩を組んで歩きだした。穴を掘っていた敷地から出て道路へと歩き、止めてある車のほうへ向かおうとした。すると、道路の遠くのほうからひとりの男が全速力で走ってやってくる。

「気づかれたか？ グロウ」

「一部始終を見られていたか」

二人は、全速力で追ってくる男を振り切るために、力を振り絞って車にたどり着き、すぐさま、エンジンを掛け、発進させた。全速力の男は、待て！ と大声でいっている。その叫んでいる姿をバックミラーに見ながら、グロウは、アクセルをめいっぱい踏んで加速を付けていた。またたくまに全速力の男は、遠く後ろの方へと小さくなっていった。

見掛三尉（みかけさんじょう）は、「カフェ・エントロピー」という名のカフェに入った。おかしな名前だと思ったのは、だいぶ昔のことで、今では慣れっこになっている。

「僕はね。今、こうして小説を書いているのは、それ相当な全生命的な訳があってやっているこ

とであって、お前みたいな奴に、ああだこうだといわれることではない」

「へー」

堂林秋彦は、真剣な顔でいい加減な返事をする。

「とにかく書かなければならないんだ。書かなければ、僕のこの先はない」

「そうか。えらいこっちゃ」

「この3部作を書き、事実を白日のもとにさらされれば、僕の父親の身の潔白が証明されると思う。1作目の『美の女』は9月に出版しただろ。2作目は書き終わった。次は3作目だ。これが相当、書いていて自分にダメージがある。でも、書いてこそ、自分を乗り越えられるものだと思う」

「2作目、3作目の出版のあてはあんの」

「ない。ないけど。書かないと完結させないと」

「そろそろ、経済的にもきつくなってくるころだろ」

「まあ、そうだけど、これだけはやっておかないとならないんだ。父親の不名誉を晴らすためにも一度、整理しておく必要がある。そして、今後の生き方にも関わることなんだ」

「だけどさ。会社をやめることなかつたろう」

「きっちり書くためにはまとまった時間が必要なんだよ。毎日少しづつなんていっても、そのたびごとに集中力が途切れて、書けるものも書けなくなってしまう」

「ふーん」

「2作目は『トラヤヌスの金塊』で、3作目は『負けざりし者』だ。これは、誰にもいってないから口外しないでほしい」

「あのさ。ちょっと、いいたいんだけど、あなた何者？ お前の父親は確かに事件になった。けど、新聞でもほとんど誰も見ることもないくらいの小さな記事で、世の中の人間は誰も、そんなことを覚えてもなければ、ほとんど話題にもしないことだぞ。世の中を騒がせた大事件の真相を究明する内容であれば、世間の興味関心もあるだろうが、そんなこともないわけだろ」

「ああ、そうだ。だけれども、僕にとっては必要なことなんだ」

「やりたいだけ、やればいいけど、だいじょうぶなの」

「そんなことお前が心配しなくていい。退職金を食い潰しているだけ。人間やらなければならない時があるってことだ」

「3部作書き終わったら、どうする？」

「書き続ける」

「好きだね」

「もう構想は、出来ている。2つほどアイデアがある。僕はね。浮かばれない者の声を大にする。もしくは、浮かばれない言葉を大にする。そんな役目がある気がするんだ。そのためだったら、書き続ける」

「なんか。大作家のようなだ。何十万部も売れている作家がいうのであればいいんだけど、三尉はそうじゃないだろ。なんか、自分の立場といっていることがバランスとれてないんじゃないか。なあ、そうだろ。なんか、笑っちゃう」

「今、やる気が漲ってるんだよ。水を指すようなことをいわないでくれよ」

「それよりかさあ。3部作を書き終わって仕事に復帰するときのことを考えて、なにか勉強したほうがいいんじゃないか？」

「そんなん、やる気ないな。燃えているんだ」

「3部作書くってのはわかったよ。三尉の心の整理のためにやればいいよ。けど、そのあとして、小説書いて食べていくってことだろ。それは、この世の中、難しいんじゃないか」

「ああ、そんなことわかってんだよ。けれども、書かざるをえない、そして書きたい、なにかが僕の中に山ほどもあるんだ。伊達に今までサラリーマンやってきたわけじゃない。書きたいことがいっぱいある」

「なにか勉強したほうがいいぞ。TOEIC800点目指すとか、資格の勉強をするとか」

「書くということは、そもそも勉強みたいなもんだ」

「そういう勉強じゃなくって」

「同じだよ」

「堂林は、やっぱりそうだな。前向きなことにいつも否定的だ」

「だってさ、そういうもんだろ」

「堂林が会社をやめて、もともと文系なのに理系の大学院に行くって、高校数学を独学でやり始めたとき、だいじょうぶかって思ったよ。けど、そういうことはいわずに、あたたかく見守っていただく。ぼこぼこにいうこともなく。それでうまくいったら」

「学校へいくために勉強するのと、小説家になろうと思って文学賞狙うのと、ぜんぜん訳が違うぞ」

「違うことないな。同じだよ」

「だいたい、何才なんだよ。もうすぐ40才だろ。俺が大学院に行くといいはじめたのは、30才前の話だぞ」

「年齢なんか問題にしないほうがいい。やるべきことをやるべきときにする。それだけだ」

「うーん」

「なによりも、今、創作意欲が高まっているんだ。とにかく今は『負けざりし者』のことで頭がいっぱいなんだ」

「コーヒー代おごってやるよ」

「心配するな。だいじょうぶだ」

めぐみエントロピーのマスターである東池友雅は、開店中も優雅に読書をしている。このカフェは、読書カフェとしてオープンしており、常時、読書好きの客が来て、しきりに読書をして帰っていく。客は、一度座ると、2、3時間席を占拠して読書に耽り、回転率がわるいが、なんとか経営は継続的に成り立っている。

「あの文芸雑誌の5月号。これこれ。この中の北口菜々子の小説、連載開始されているでしょ。おすすめ。面白いから」

店長の東池が、会計に来た客に勧めている。

「はい。525円です。ありがとうございました」

店内の壁面には雑誌や、文庫本がセンスよくディスプレイされ一面に並べられている。雰囲気よい間接照明が灯り、落ち着いたカフェを演出している。店内には南洋の植物が植樹され、ゆっくりと寛げる空気が漂っている。それでいて清々しい。店長の人柄からか、店内の清潔感からか、店内の白を基調とした色から来ているのからかわからぬが、おそらくその全部からであろう。

「三尉ちゃん。少し前にね。髪の毛を逆立てた二人の男が三尉ちゃんを訪ねてきたよ。見掛三尉という人は、よくここに来るのかってね」

「髪の毛を逆立てたって、どういうこと？」

「全身喪服のように黒で固めたスーツを着て、頭はバリバリに逆立てて、ひとりは赤、ひとりは緑。一見するとバンドでもやっているようなかんじに見えたよ」

「僕のファンかな」

「いや、それは違うと思うよ。三尉ちゃん、そんなに売れているわけじゃないしね」

「即、否定したね」

「コスプレ系というわけでもなかったなあ」

「なんだろうね。わかんないや」

堂林が笑っている。堂林は嫌な笑い方をする。人を小馬鹿にするような陰湿な、そしてネガティブな、どうせお前なんかダメだといったそうな。。。

「なにがおかしい」

「いや、別に、なんでも。なんでもないよ」

堂林が笑っている。

「まあ、いいや。あのさ。さっきから気になっていたんだけど、あそこのカップル、やけにべたべたしているんだよね。視界に入ってうっとうおしんだんだけど」

堂林は、話題を変えた。三尉は、後ろを振り返って見てみると、男が女の腰に手を回して、密着してでろでろになって喋っている。その奥を見ると、また別のカップルがいて、背筋を伸ばして整然と向き合い寡黙に読書している。

「禅とキリスト教だな」三尉が言うと、

「なにそれ？」と堂林が訊く。

「奥の二人は、なにか呼吸を合わすかのように無言で和している。手前の二人は、アモーレだ。お互い好き好き、大好き、溶けてしまいますってかんじだ」

「確かに対照的。俺は、アモーレはムリだな。なんだよ。あれ」

「日本人的感覚からすると禅は意外に、理解しやすく、ずっと入っていけると思うよ。禅的思考って、きっと日本人の感覚の中に入り込んでいるんじゃないのかな。聖徳太子が、和をもって尊しとする、といったときから、いや、適確に日本人の性質をいい当ててたのかもしれない。茶道に至っては『和敬清寂』。千利休の言葉だ」

「じゃあ、手前は」

「激しく情熱的にアモーレだ。日本人には激しすぎるかもしれない。けれども、本来的な欲求だ。自由に表現するほうが健全だと思う」

「でも、公衆の面前でやめろよな」

「やっかみか。別にいいだろ」

「そろそろ出よう」

「いや、ちょっと、待ってくれよ。もう少し話したい。宗教というものは、目的とするところは同じで、そこへのアプローチが違うだけだと思う。禅もキリスト教も、心の平安や癒しを求めている。そういう意味で同じなんだよ」

「そもそも宗教なんて、うさんくさい」

「堂林には、必要がないかもしれない。それを求める精神状態になっていないということだけで、単なる胡散臭うものにしか見えないだろう。なんでもそうだ。必要な人にとっては、ものすごく必要であるけれども、不必要な人にとっては、限りなくムダなもの。自分がわからないからといって、切り捨ててしまうのは、個人的にはなんら問題がないかもしれないけれども、社会や歴史から切り離してしまうことは、人類の財産をなげうっているようなものだ」

「よくわからないな。俺は、その話全く興味ない」

「そうか。わかった、じゃあ、例えばだよ。僕の本『美の女』も、いろいろな人に読んでもらった。幅広い年齢層に。20代にずば抜けて反応がいいんだよ。だけれども、60才以上になると、格段に評価がわるくなる。それは、きっと時代性とか、求めるものがぴったり20代にあったんだと思う。けれども、高齢者には受けなかった。逆に、2作目の『トラヤヌスの金塊』は、50代以上に評価が高かった。だからね。その内容、考え方が、その精神状態やおかれた環境とぴたりと合う場合、共感性が高まるわけで、すべての人がよいとおもわれる作品なんてないものなんだよ。僕は本を書いて、それを実感している。宗教もそれと同じこと」

「確かにね。どんな作家でも、おもしろくないとか、平気で書かれていることもあるからね。だけどさ。それにしても大作家みたいだね。えっ！　なんか、聞いていて大作家の誰々が論じてますってかんじだ。僕の作品は。。。なんていっちゃって。なんか、笑えてくる」

「僕もね。ちゃんと、書いているから。感想や意見ぐらい出てくるの」

「いいけどさあ。置かれている立場と、いっていることのバランスがさあ。とれてない」

「気にするなって。。。　そろそろいこうか」

「そう、しよう」

三尉と堂林は、店のレジに進んだ。店長の東池が、本を片手にレジを打っている。

「どうも、ありがとうございました。あの髪の毛が逆立だっている男がきたら、どうしようか？」

「知らないって、いってもらえますか？　本当に知らないのですから」

「わかったよ。そう、いっとくよ」

見掛三尉と堂林秋彦は、カフェ・エントロピーを出た。

三尉は駅までの間にある本屋に立ち寄るため、そこで堂林とわかれた。三尉は、買おうか買わまいか迷っていた本を、買うことにした。本を買って、また、歩き始めた。

見掛三尉は、人通りの少ない路地を歩いていると、後ろから人の気配を感じた。後ろを振り向

くと、長身の男二人が、三尉の両サイドにピタリと付き、ささやく。背中に何か突きつけられている。

「少しお話を伺いましょう。私の言うとおりにしてください」

三尉は、咄嗟に後ずさりして反対方向へ走ろうと思ったが遅かった。両腕を左右の男に抑えられた。

「なんですか。なにをするんですか。ちょっと、待てよ」

二人の男は、抵抗する三尉を左右から取り押さえたまま、平然と前へ進む。

「喫茶店に入りましょう」

ものすごい力で両サイドから抑えられ、なすすべもなく三尉は、喫茶店とやりに連れていかれた。中へ入ると真っ白な部屋であった。中には簡易机とパイプ椅子だけが置かれている。

「座れ！」と緑の毛が逆立った男が多少興奮気味にいう。

「ちょっと、待てよ。どういうことなんだ。訳も分からず、こんなところへ連れてきて。失礼極まりないだろ。私は帰るぞ」

「はい、はい、はい。そう興奮しないで」赤の毛が逆立った男が三尉をなだめる。

「知っているんだよな」緑の男がいう。

「あんたらのことなんか、まったく知らない」

「お前が知らないといっても、我々は知っている。証拠もある。これを見てくれ」

緑の男が、ポータブルDVDプレーヤを三尉の前に持ち出し、スイッチを入れ、映像が流れ始めた。

「これは、見掛三尉さんですよ」

映像を見ると、三尉が全速力で走っている姿が写っていた。画像は揺れて乱れている。

「確かに私だ。でも、どうして」

「見掛さん、ですよ。我々と関係がないとはいわせませんよ」と緑の男がいう。

「これは確かに私です。けれども、あなた方を追いかけていたとは知らなかった。あの時は、空き地に向かって石を投げたんですよ。あの日は、なにか物事に集中できなくて、イライラしていた。特にわけもなく狙いを定めて石を何個も遠くに投げていた。そうしたら、ぎゃーという男の声が聴こえたんです。自分が投げた石があたったものと思って、驚いてすぐにその場に走っていったんです。二人の長身の男がいたんですが、なにか急いで車に乗ってその場から逃げたんです」

「あの時は、痛かったよ。三尉さん。頭から流血して15針縫ったぜ」と赤の男がいう。

「申し訳ない」

「そうですか。我々の行動を監視して、邪魔をするつもりだと思いましたよ。そうですよね。三尉さん」緑の男がいう。

「邪魔？　なんで私があなたたちの邪魔を？」

「あなたのことは調べあげている。我々とあなたは、密接な関係がある。そうですよね。あなたもそれに気がついて、あのような行動に至ったわけです。それを我々がわからないとでも」

「なんのことだか」

「いづれにしても、我々に協力しなければならないことは明確です」

「皆目わからない。胡散臭いな。頭部裂傷の医療費を請求しているんだったら、はっきりいってもらったらいい。そんな遠まわしな表現はよしてください。いくら掛かりました？」

「なら、それもいただこう。10万円だ」

「そんな掛かるわけないでしょう」

「我々は医療保険がきかない。わかるよね」

「話がまったくわからない。10万円も払えんよ」

「最低限、10万円は頂かないといけない。それよりも、あなたは、我々のしようとしていることを阻止しようとしている。我々はあなたが邪魔なんだ。今、あなたがやろうとしていることをやめないと、我々が非常に痛手を被ることになる。その装置のことだが、あれを壊したって、止められるようなものじゃないよ。三尉さん、あなたは簡単に考えすぎている。どうしたって、我々を止められやしない」

「ふっ。止められない？ そんなことをいわれると、止めたくなるじゃないか。ふっ！」

「やっぱり、そうか。タイムマシンは完成している」

「荒唐無稽な。あんたたちは、一体、なんなんだ」

「知っているのになあ。しらしらしい」

三尉は、この胡散臭い人間たちから逃げようと考えた。

「わかった。とにかく、今日は10万円だけ支払おう。それで、もうおしまいだ。近くのATMで下ろしてくる」

「そうしてくれると助かるな。まあ、そのまま逃げてもいいんだよ」

「逃げはしない」

そうやって、三尉はその白い部屋を出て、そのまま逃げた。赤毛の男と、緑毛の男は追ってくることもなかった。

三尉は帰宅して、夕食をつくり食べたあとすぐに寝た。翌日は、謎の男二人から身を隠すかのように、家に閉じこもった。またその翌日になっても三尉の自宅に訪れるものはなく、なにも変わりがなかった。様子見のため翌々日、カフェ・エントロピーへ行ってみると閉まっていた。となりのまんじゅうやのかみさんに訊いてみると、店長は亡くなったとのことであった。

「亡くなった？ でも、どうして、お元気でしたよね」

三尉は、そう尋ねたが、まんじゅうやは、いま、警察が調査している最中だと不安げな顔をして答えた。なんでも、店長は店のレジ前で倒れているところ、入った客に発見された。厨房にいた息子は気がつかなかったらしい。店長が亡くなったのは、三尉が自宅に籠っていた日であった。

店長の通夜と葬式に参列し、その奥さんとその家族を見舞った。奥さんは気の毒なほどに顔が青ざめていた。沈んだ面持ちの息子は、式の段取りで忙しそうに走り回っていた。見掛三尉は、おくやみを申し上げ、そしてなにか力になることはないかときいたが、葬儀の段取りはなんとか親族でできているので特に手伝っていただくかなくことはないかと丁重に断られたが、カフェ・エント



ロピーは、すぐにでも開かなければならず人手が足りないので、もし、よろしければ手伝ってほしいと頼まれた。三尉は、作品を書き上げたばかりで、次の構想を練って、ただ、ぶらぶらしているだけのタイミングであったので、快く引き受けることにした。

1週間もたたないうちに、カフェ・エントロピーは再開した。三尉は、カフェのレジとウェイターを受け持った。学生の頃、ファミレスのバイトをしたことがあったので、なんの抵抗もなく、すぐにやりくりすることができた。読書カフェだけあって、ほかのカフェよりも雑誌や本の数が多く、その整理を除けば、ファミレスのバイトとさしてかわらない。また違うことといえば、店長が座っていた椅子に座って、読書をする時間があることである。店長がいつもいたカフェに自分が成り代わって、その場にいることにひどい違和感を覚えていたし、店長がいるべき場所に店長がいないことにいかようにもできない不在を思い知らされる。でも、客は、時が来れば入ってくるし、時が来れば出ていく。そしてそれは、店長なしにでも当然のこのように成立し、コトが進んでいく。涙は出ない。ただ、店長が逝ってしまったなど、思うだけである。店長は死んでしまった。とくになにも感じない。いや、死という響きに驚きはするが、実のところなにも感じていない。精神的な依存の度合いによって、その人の持つ死の意味も異なってくるのかもしれない。いつもレジ横に座って本を読んでいた店長がいなくなってしまった。最近読んだ本の感想を率直に笑顔で語る店長は、どこかへ消えた。テーブルの台をすばやく拭く店長はもういない。だけれども、命を奪われたのであるならば、無念であったろうと思える。その命を奪ったものに対して、烈しい怒りが込み上がる。

客がカフェに入ってくる。

三尉は、いらっしゃいませと挨拶をし、空いているテーブルへ案内した。

「店長さん、お亡くなりになられたんだってね。残念です。原因は不明なんだって？」

「それが、ちょっと、まだ、警察で調べているところです」

「はやく、見つければいいですね。この辺も物騒になってきたからね」

「ええ、突然のことで、私も。。。私は、店長の息子さんに頼まれて、ここで手伝っているんです」

「そうですか。大変だね」

「はい。。。ご注文はどうされますか？」

「えっとね。抹茶ラテ1つ」

「以上ですか？」

「以上です」

そのような会話を、今日は何十回となく繰り返した。店長はどこへ行ってしまったのか。そうか、天国だ。店長は天国へ行ってしまった。

カフェを閉め、その後、息子の堀内圭吾と、客の誰もいなくなった店内の窓際の5番テーブルに座って、少し話をした。

「警察から、なにか連絡ありましたか？」

「また事情聴取をしたいと、昼間に連絡がありました」

「そうですか。大変なことになってしまいましたね。なんといいやら、まともなこともな

にもいえませんが。。。私はお店にしばらく出られますからね。大丈夫ですよ。店長も少し休んだほうがいいのかもしいですよ」

「いや、休むより、なにかしていたほうがいいですよ。仕事はします」

「そうですか。犯人見つかるといいですね」

「はい」

「圭吾さん、実際に、店長が亡くなられた時に、厨房にいたんですよね」

「そうです。お客さんが、父が倒れていると見てみると、父がレジの前で」

堀内圭吾は、割れた手の爪をいじくりはじめた。

「そうでしたか」

「それ以上、本当になにもわからないんです。今でも、なにかウソのような話にも思えて」「本当に、信じられないような話です。私ね。私も奇妙な状況に出くわしました。出くわしたというか、なにか、嫌な予感がするんです。少し怖い気がして」

「どういう話ですか。父に関係あるんですか？」

「あるか、どうかわからないけど、接点は少しあります」

「ある？ 接点で、どんな接点？」

「話を始めから話すと、私が、あの事件のちょっと前に、カフェ・エントロピーへ立ち寄ったときに、店長から、2人の男が私を探していたと教えられました。長髪の頭を立てて赤毛と緑毛に染めたパンクロック風の格好をした男二人。そうして、聞かされたあと、カフェを出たあとすぐに、その男二人が私のあとを付けてきて、短い時間だが私をある部屋に監禁した。そこで言われたのが『邪魔をするな』と『タイムマシンはできている』と」

圭吾は、頬が上がり半分笑いかけている。暗い顔に明るさが灯ったように見えた」

「タイムマシン？」

「いや、別に私は、笑わせようとしていっているわけではないですよ」

「でも、このタイミングでタイムマシンはないですよ」

「ですよ。私もおかしいと思っているんですよ。けど、確かに奴らはそうだったんです」

「面白そうな話ですね。タイムマシン」

「確かに、タイムマシンはないですよ。。。。けど、そういう話もあったんです。やっぱ、嘘かな、冗談かな、あの話は。でも、冗談でこんな手の込んだ訳の分からないことしないですよ」

「なにがですか？」

「なにがって、だから、私を監禁して、そのあと私はすぐに逃げてきたんです」

「へー。それで、どうしてそんなことになったんですか？」

「私も、訳が分からないから、すごく怖いんですよ。なんとなく」

「それと、私の父がどう関係あるのですか？」

「だから、ぜんぶ、わからないんですよ」

「いい加減な話ですね。その男二人と父と、どう関係あるんですか？」

「だから、わ・か・ら・な・い・の！！」

「なんの参考にもならない。けど、なんか関連がありそうといった程度ですね。一応、私から警察に、そんな話があるということだけ、伝えておきます」

「そうですね。そのほうが、私も安心だし」

三尉は、もやもやした話をし始めた自分を悔やんだが、事実、もやもやしているのだから、しょうがないとも思っていた。そう考えていると、ぼそっと、圭吾が話し始めた。

「父は、具体的にはわからないけれども、ある団体と揉めていたのを一回、聞いたことがあります。これも、三尉さんと同じように、もやもやした話になってしまいますが」

「もやもや？ 話してみて」

「父は、ある宗教団体に所属していて、そこで熱心に活動していました。もともとは、クリスチャンだったのですが、その後、禅寺へ修業したのですが、そこでも、なにか自分にあわないものを感じて、最終的にザピトという新興宗教団体に所属することになったようなんです。宗教というより、哲学者集団というか、そんな傾向の強い集まりです」

「へー。それは知らなかった。店長にそんな側面があったなんて。だから、哲学について、やたらと見識があったんですね」

「で、私が知っているのは、そういう団体に所属していて、電話口でなにか大声を出して揉めている姿を見ただけ。それだけ」

「もやもや、しているね。もやもや」

「でしょ。もやもや。それだけなんです。そのことは警察にも伝えていますが。ただ、はっきりしたことはいえない。親父を殺したのは一体、誰なんだろう」

握りこぶしで、テーブルを叩いた。

「つらいですね」

「絶対に犯人を吊るし上げにする」

「私も全面的に間違いなく協力します」

「ありがとうございます」

二人は、消灯と戸締まりをして、なにか、手で拗うことができない苛立ちと、不在の空虚感と、背後に拡がっている闇の不安を感じつつ、店を出た。

家に帰り、シャワーを浴び、一段落ついて、ソファに座り、テレビを見ているところ、電話が鳴った。電話を取ると女であった。要件を訊くと、三尉がネットに掲載していた小説を使わせてほしいとのことであった。声は割と低めで落ち着いたふうな話しぶりであった。詐欺まがいの勧誘でよくあるような、声のきんきんした若い女からの電話ではなかったので、なんとなく会話を続けていた。旅行代理店をしている会社からの電話で、新事業を起こすにあたって三尉の小説が、是非とも必要だという内容であった。新事業と聞いて、怪しいと感じたが、こういった機会はなかなかないし、なにしろ自分の小説が、どのような形で評価されたのかを知りたいということもあったので、その女と会うことにした。

その女とカフェ・エントロピーで待ち合わせをした。店内に入ると、見慣れないショートカツ

トのスーツ姿を着た女がいた。すぐにその女だとわかった。「友川結子です」といって女は名刺を差し出し、自己紹介をした。名刺には「サプライズ・エンターテイメント社」と書かれていた。立ち居振る舞いの綺麗な女であった。ほのかに香水のいい匂いがする。テーブルに着いて、女は急に電話でお呼びだてしてすいませんといっして話し始めた。

「弊社は、旅行代理店でもありますが、そのほか、イベント企画やエンターテイメント系の業務も行なっております。そこで、見掛さんの小説をヒントに弊社で新たなエンターテイメント企画を考案し、見掛さんの小説とタイアップして世の中の人々に、その企画を知って頂こうと考えまして」

「ということは、私の小説を本にさせていただけるということですか」

「そうです」

「願ったり叶ったりです」

見掛三尉は、あまりにもよい話に裏がないか心配にもなり、少し慎重に考えないといけないなと思った。

「是非とも、見掛さんと是非、一緒にお仕事をさせて頂きたいと思います」

少し語気を強め、強制的な雰囲気を感じたが、一緒に仕事をさせて頂きたいといわれて嫌な気がしない。しかも、友川結子は目や鼻や、口元、そして頬にへこむ笑窪、耳、そして首や髪、胸元や、指先のひとつひとつを凝視し、その端正な顔つきと姿に清々しさを感じた。耳は福耳だ。気づいたときには、私も一緒に仕事がしてみたいと話していた。

「ただ、一緒に仕事をするとなると、いろいろ条件や決め事もあると思いますので、そちらの方も、概要等お聞かせください。どのような企画をお持ちなんですか？」

見掛三尉は、話を聞いているうちに笑いたくなってきた。

「いやいや、ご冗談を。はっはっは」

「いやですわ。これは冗談でもなんでもないですよ」

「だってね。確かに私はSFものを書きましたけど、それを実際のビジネスとして行おうとするなんて。どう考えても、ありえないでしょう」

「見掛さん。世の中、ありえないことなんてないんです。まだ、あなたが知らないだけのこと。人間、自分の頭の中で考えられることがすべてだと思込みすぎている。高々、数十年前後を経験するだけの人間が、137億年の歴史がある宇宙の全知識に叶う訳もない」

「えらく大きな話になりましたね」

「それから、見掛さん。あなたは、パラレル・アミューズメント社から、すでにサプライズ・エンターテイメント社の人間だと思われていますよ」

「どういうことですか？ パラレル・アミューズメント社って、どこの会社ですか？」

「パラレル・アミューズメント社は、我々の親会社です。ですが、弊社に対して状況にそぐあない方針を提案しているため、弊社は独立を図ろうと、今、画策しているところなんです」

「いろいろと大変な状況なんですね。なんとなく、危なっかしい話に思えてきましたよ。もともと、サプライズ・エンターテイメント社は、独立系ではないんですってっけ？」

見掛三尉は、苦笑いをする。

「今の時代では、そうです。会計的にも独立しています。ただ、時空的に見たときには、完全にパラレル・アミューズメント社の子会社になっているのが、実情です」

「へ??? 時空的って、どういうことですか? なんか、私のテリトリーのような気がしてきましたが」

「ええ。パラレル・アミューズメント社は、2138年に創業した会社なんです」

見掛三尉は、友川結子の顔を凝視した。友川結子は、澄ました顔でこちらを見ている。冗談をいっているようなかんじでもない。見掛三尉は、目をぎゅっとつぶり、そして、あけたりつぶったり目をぱちくりさせた。

「はっはっは。ご冗談を。未来の会社が御社の親会社。それは驚いた。SFのネタになる。ありがとうございます。それでいきますよ。そのアイディア、頂きました。そのアイディアをもって、私は退散します。ありがとうございます。私、もう帰ります。あなたの戯言をまともに聞いているわけにはいきません。そろそろ、ここのバイトの時間です。私、ここでバイトしているんです。ですが、友川さん、たまにはこのカフェに来てください。あなは綺麗だし、なんか、和む。けど、あなたと仕事はできません。申し訳ありません。わざわざ、ここまで足を運んでくださいますてすいませんでした。残念ですけど」

「えっ? 私、なんか変なこといいました? たしかに、2138年創業の会社はおかしいのはわかります。けど、説明はこれからです」

「最後まで、説明を聞かなくてもわかります。はっきりいいますけれども、聴くに耐えない」

「そうですか。ですが、あなたは、すでに、弊社の一員です」

「意味不明ですよ。ホントに」

「ここの店長は、パラレル・アミューズメント社と敵対関係になったから消されたのよ」

見掛三尉は、店長の名前が出たことに驚き、唇が震えた。同時に、喉がからからに乾いた。

「今、なんていいました?」

「店長は、パラレル・アミューズメント社と敵対関係になったから消された」

見掛三尉は、また、友川結子の顔を凝視した。真顔のままであった。

「店長が属した科学至上主義集団ザピトは、修正科学至上主義を唱え始め、パラレル・アミューズメント社の利益と相反することから、敵対的な関係になっている」

「店長のことも知っている?」

「はい」

「友川さんは、サプライズ・エンターテイメント社の方でしょ。ザピトとの関係は?」

「ザピトはそもそも、科学の力で人間は全てをなしうると強く信じる者の集団よ。人体の復活、長寿命化、反重力装置、瞬間移動、タイムマシン、無限エネルギー……。ザピトの人間は全世界に散らばっている。日本、アメリカ、中南米、インド、ヨーロッパ、アフリカなどで、強烈な意志でもって行動を起こしている。そして、サプライズ・エンターテイメント社は、その影響を受けて設立された会社なのよ」

「敵の敵は友ということか」

「そういうところね」

「けどね。この話って、私のSF少しパクってない？」

「パクるってなに？ こっちが現実のなのよ。あなたこそ、この事実を知って小説にしたんですよね」

「知る訳もない。私のは完全なるフィクションだ。当たり前だろ」

「さあ、どうだか。私とあなたは、もうすでに同じ船に乗り合わせているの」

「いくらなんでも、私は現実とフィクションの区別ぐらいはつく。もう、お帰りだ」

「ええ。今日のところは帰ります。今日はあなたと話ができてよかったわ。また、会うことになると思うわ。それでは帰ります」

友川結子は、席を立って、会計を済ませて、その場を立ち去った。

見掛三尉は、もうすぐ自分になにか重大な影響を及ぼすだろうことが忍び寄っていることを感じていた。感じてはいるが、決定的になにか影響を及ぼしているかということとそういうわけでもない。けれども、なにが近づいてきている。不気味さは感じている。なにか冗談のような気もするし、現実のものではないようにも思える。だって、赤毛の男と緑毛の男、タイムマシンは完成していて、科学至上主義集団ザピトだ。堂林に話せば、冷たい視線を送られること間違いない。けれども、堂林に話した。

「見掛三尉、いくらお前の生活が非現実的でも、思考まで非現実的になったらおしまいだぞ。そういった生活感のない生活が、お前の思考に悪影響を及ぼしている。はっきりいって、お前は人間の過剰な部分を生きているだけにすぎない。そんなところにおいては、頭もおかしくなるのは当然。しっかり、働いたほうがいいと思う」

いつものように堂林に小馬鹿にされ一笑されるかと思ったが、なにか今日は本気で心配しているようであった。自分でも非現実的なことを喋っていることはわかるのであるが、事実をいったまでだ。

「だから、お前は、不名誉を晴らすために小説を書いているんだろ。早く書き終えて働け！」

「ああ、そうだ。それに取り組んでいる。だけど、別にSFも書いている」

「SFはやめておけ。このままだと、お前の父親は、女に目がくらんで、会社の金を横領して、その金を女に貢ぎ、それが発覚して捕まった。そのままになるぞ」

「事実は、女の医療費を補填するため金が必要だった。研究開発費の報酬として約束していた金が支払われず、事前に会社から無断で引き出した金が支払われずに、結局、横領したような形になり、会社側に訴えられ裁判で敗訴。当然、その後、解雇された。女は委託元の担当で、父と子くらいに年が離れている。そこに変な関係などなにもなかったんだ。純粋に女を助けようと思っただけで、それを世間が、あることないこと書きまくり騒ぎ立てたんだ。その事実を分からせる必要がある。父親は研究開発に没頭するだけの純粋な研究者だったんだよ。それが、裁判で負けたあと、蒸発してしまった」

「タイムマシン。うーん。SFの中のだけの話にしてくれよ」

「でもな。やっぱり、そっちも事実だ。変な男たちが、私を監禁しようとして。。。」

「わかった。わかった。監禁ね。物語としては悪くはない。わかった。わかった」

見掛三尉は、周囲で起こる奇妙な動きに惑わされて、本来すべきことを見失っていることに気がついた。まだ、作品は書き終えていない。事実もしっかり裏は取れていない。父の研究の委託元を訪ねることにした。政府系の研究機関GG3の担当者にあつて直接、話を訊くことにした。

「見掛さんのお父様は、私の研究の委託先の研究者でしたの。それだけです。ある日、開発を妨害し、私にストーカー行為を働いた男が現れたのよ。やけどを負わされた。それを気の毒に思っていたあなたのお父様に、顔の整形、具体的にいうと、皮膚の移植手術の費用を立て替えていただいたのよ。ただ、その後、結局、それが会社から横領されたお金だった。私は、申し訳なくて・・・」

「なんの研究委託だったのですか」

「ナノ世界に入るための人工膜です」

「人工膜？」

「ええ。その膜は、意識だけ透過する性質があるんです。すなわち魂だけが透過できる」

「・・・」

「おそらく、なにを話しているのかわからないでしょうね。研究の目的の全容を説明します」

そういうと、そもそものところから話しますという。

「GG3というのは、Government Go To GOD というプロジェクト名です。科学技術を使って神の国を解明しようとする目的で作られた組織です。政府がオカルト団体的なことを指向していると批判されることもありますが、これは我が国にとって国益となることから、絶対に必要なことです。それから全人類にとってもですね」

見掛三尉は、めまいがしてきた。

「『神は細部にいる』そういう言葉を聞いたことがあります？ あれは事実です。神の国は、ナノ世界にあるのです。そして、ご存知かもしれませんが、量子力学の世界では、我々の住む世界の法則と違った法則によって支配されています。極微の世界では、位置を特定すると速度がわからなくなる。逆に速度を特定すると位置がわからなくなる」

「神の国は、極微の世界だと」

「そうよ。細部へ行けば、全宇宙を得ることができる」

「それが『神は細部にいる』という意味とでも」

「そのとおり。そして、そこには肉体を持っては訪れることはできない。人間ならば意識体のようなふわふわとした軽いものとなって、たどり着くことができる」

「そして、ナノ世界に入るための膜の研究を、あなたのお父様にさせていただいていたのよ」

見掛三尉は、父親のすべてを知っていたと思っていたが、そうではないことを思い知らされた。

「ナノ世界は、神の国なの。神の国を通せば、瞬間移動も反重力も、タイムマシンもすべて可能になる。そういう生の世界があるの。人間の手でわざわざ装置を作らなくても、そこを介せば、我々人間の欲していることが可能になるのよ」

「・・・そんな世界があるのですか」

「我々の小さな頭を使って考えるより、自然にすべてその答えがあるのよ。ネイチャー・テクノロジーという考え方もあるわ。自然の原理を取り入れて、または参考とすることによって、技術製品を作ったりしているけれども、それと同様なこと。あるものを使う。利用する。それが一番の効率的な方法なのよ。もともと、そうあるべきものとして期待されているのよ。神の国、もしくは天上の国も事実、存在しているのだから、それを使わない手はないわ。今の科学至上主義は、あまりにも自らの力を過信しており、装置が巨大化しすぎる傾向がある。でも、自然で、そんな大きな装置もなければ、細部に至っても精密な作りですべてがうまくことが運んでいる。ところが、それは大間違い。原子力発電は、その最たるもの。過渡的な装置でしかありえない。よくもまあ、人間はあのような危険でやっかいなものを人間社会の生命維持装置として選んだものね。人類は失敗して何事も知るわ」

「そうすると、ナノ世界へ入れれば、タイムマシンが使えると？」

「正確に言うと、ナノ世界を通れば、どの場所にもどの時代にも行くことが可能になるということかしら」

「私の父親が開発した人工膜を通れば、そこへいけるという意味ですか」

「そう。そこへ行けば、あなたの死んだお父様にも会えるわ」

「信じられない。信じられませんよ。どうして、そんなこと信じられます？ あなたの知っていることは皆目おかしいですよ。しかも、父は死んでいるんですか？ 父は家を出たまま、蒸発。行方がわからないままなんですよ」

「信じなければいいわ。あなたは、事実もなにもわからないまま。お父様の不名誉も晴らせないままになるのよ」

「その膜を通れば、意識が抜けるわけでしょ。ある意味、臨死体験をするようなものでは？」

「鋭い。その通り、ナノ世界へ行っている間、肉体は嚴重に保管されるように決まっている。今は、試験的段階よ。以前、別の方法を探っていた。人間の意識をプログラミングして擬似意識を作って、ナノ世界へ送っていたのよ。けれどもどうしても、記憶障害が発生してしまう。ナノ世界の記憶が戻らないのよ。それで、その不具合を修正するのに考えだされたのが、人工膜よ。あなたのお父様はノーベル賞ものよ」

そこへ店長の息子が現れた。

「父の死亡解剖の結果がでました。その結果、奇妙な事実が判明されました。心臓がすべて、焼き切られて、姿かたちがあとかたもなくなったようです」

竹内奈緒は、間髪を入れず応答した。

「それは、きっと照射銃よ。特定の部位のみを焼き切るためのもの」

「何か知っているようであれば、教えてください。父とあなたとの関係は？」

「私の所属はGG3。ザピトのメンバーでもある。だから、あなたのお父さんと面識はある。けれども、お父様の殺害された事情まではよくは知らないわ」



カフェ・エントロピーの窓が白く割れ、大きな音と共に崩れ落ちた。烈しく銃弾が飛んだ。銃撃する男は、あの緑毛と赤毛の男であることが見えた。三人は、カフェの裏口から逃げる。逃げたところで、竹内奈緒はいった。

「パラレル・アミューズメント社の者よ」

「彼らがそうなのか。私も彼らに監禁され、邪魔するなと釘を刺された」

「彼らは、ここの住人じゃない。未来からの使者よ」

「奴らは、完璧に私を敵だと思っている。私はなにも知らないし、やってもいない」

「もう、あと戻りはできない。彼らは、タイムマシーンを使って、過去にそのサービスを提供して、過去とビジネスをしているの。しかし、彼らのやり方は卒がない。しかし、技術の新たな可能性を知った我々は、彼らのような未来は必要ない。私たちに協力して頂戴。あなたは、すでに未来から敵と思われている。あなたが違うと叫んだところで敵はきくようなものではない。彼らの協力者となるか敵対者となるかどちらかなのよ。しかも、私はあなたのお父様の見方でもあるし」

「私は、あなたたちの状況がわからない。わからない状況で判断はできない。私のしたいことは、父の汚名を晴らすこと、それだけだ」

「きっと、晴らすことに役立てると思う。それだけは約束する」

「そうであるなら、協力する。そうでないとわかったときには、それなりの対応を即座にすることになると思う」

「好きなようにして」

「それと、さっき、パラレル・アミューズメント社っていついたけど、サプライズ。エンターテイメント社のことは知っている？」

「もちろんよ」

竹内奈緒は頷いた。

「パラレル・アミューズメント社の友川結子っていう人知ってる？」

「当然よ」

「彼女にも、私とあなたは同じ船に乗り合わせたようなものだといわれた」

「そのとおりよ。仲間よ。そこまで分かっているならいうけど、パラレル・アミューズメント社とサプライズ・エンターテイメント社は対立している。パラレル・アミューズメント社は、タイムマシン・サービスの手数料を一方的に釣り上げようと要求していることに対して、サプライズ・エンターテイメント社は抵抗している。それに対して、サプライズ・エンターテイメント社は、タイムマシン技術を未来から盗もうと画策しているの。GG3、ザピト、サプライエンターテイメント社にとっては、パラレル社は今となっては共通の敵よ」

「つまり、未来を相手にしている」

「そのとおり。私たちは間違った未来と契約しているの。現在に負荷をかける一方で悪影響のほうかむしろ大きい未来であるなら、そんな未来は必要ないの」

「縁を切る必要があると」

「そう」

「そのためには、私はどう動けばいい」

「あなたを追う二人に男を殺して。逆に殺さなければ、あなたもやられるだけよ」

見掛三尉は、殺す訓練は受けたことがある。以前所属していた自衛隊で訓練を受けていた。けれども、実際に人を殺したことはなく、現にそれを求められると恐怖さえ覚える。自衛隊での訓練は戦場での訓練だ。けれども、ここは日常の延長線上での殺人になる。未来人だとはいえ、同じ人間だ。非常に抵抗がある。殺せと言われても、すぐに同意できるようなものではない。

「そのような状況になれば、私もやる」

そう答えていた。見掛三尉は、自分がある組織から狙われていることを考えると寒気がした。今、この瞬間にも刺客がしのびより、背後から鋭利なナイフで刺されるかもしれない。自分を奮い立たせるように戦闘シーンをイメージする。

「あと、紹介したい人がいるの」

それは、あとで後日、連絡する。といって竹内奈緒は去っていった。残されたのは店長の息子と見掛三尉であった。今、起こっている目の前の出来事については、さすがに信じ始めていた。事実、銃弾が飛んできて、つい最近、現れたものの話のつじつまがなんとなくあっている。すべては、つながっているように思えた。

(つづく)

## カフェ・エントルピー

<http://p.booklog.jp/book/80918>

著者：池田真哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ikeshin55/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80918>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80918>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ